

II-1. 調査と研究

飛鳥藤原京の調査

飛鳥藤原宮跡発掘調査部が、1997年度に実施した発掘調査は、藤原宮跡4件、藤原京跡3件、飛鳥地域5件で、いずれも諸々の工事に対する事前調査である。本年度の学術調査は、桜井市教育委員会と協同で実施した吉備池廃寺第2次調査1件のみである。従前に比べ藤原宮・京跡の調査件数が少ないのは、開発事業の減少とも多少関係するが、飛鳥池遺跡に計画され、平成11年秋完成予定の万葉ミュージアム建設に伴う調査に総力をつぎ込まねばならない事情があったからに他ならない。

藤原宮跡では、第85次調査として西方官衙南地区、第83・7・14次調査として内裏南辺地域の調査を実施した。西方官衙地区は、遺構の稀薄な地域で今次の調査でも7世紀後半の掘立柱建物1棟を検出したにすぎない。同地域の下層は、県内でも有数の弥生時代の大規模集落跡である四分遺跡であり、今回も一部、下層遺構の検出を試みた結果、中期の環濠、中期末の墓葬を確認した。なかでも中期末の墓葬は、戦禍などで不慮の死を遂げた男女二体を同時に土壌に埋葬したもので、当時の社会情勢や近畿地方人に関する貴重な知見が得られた。

第83・7次調査では、内裏内郭の南を囲う掘立柱塀や大極殿北側で確認した宮造営時の運河SD1901Aの延長部を確認した。また、第83・14次調査では、前述の内裏内郭の南の塀の南雨落溝を検出している。内裏南内郭塀は醍醐池の岸からかなり離れた池底で確認しており、内裏中枢部の存在が予想される池底でも、深く掘られた柱穴の場合には、残存している可能性が考えられ、池底を調査する必要性を実感した次第である。

藤原京跡では、第88次調査として、本薬師寺の南西、右京九条三坊・四坊の調査を実施し、西三坊大路関連の遺構を検出した。その他の藤原京の調査は小規模であり、かつ周辺部の状況も明らかになっていないので省略する。

飛鳥寺地域では、飛鳥寺寺域内で2箇所、飛鳥池遺跡で2箇所（第84・87次）、飛鳥池東方部で1箇所（第86次）で調査を実施した。飛鳥寺の南西部で実施した第83・1次調査では、従前検出の石敷広場と一連と考えられる石敷、北辺で実施した第83・2次調査では、伽藍方位に一致する掘立柱建物を検出している。

第84・86・87次調査は、万葉ミュージアム建設に伴う事前調査である。第84次調査区は、飛鳥池の北、飛鳥寺東南部にあたり、前年度より引き続き調査を進め、宮期の遺構が稀薄な南辺地域、ならびに北辺の道路遺構周辺の下層遺構の確認を主目的に実施した。南辺部では、新たに方形池、両側に溝を配す掘立柱塀、踏石遺構等を検出。塀の両側の溝からは、天武期にさかのぼる紀年木簡、飛鳥寺関連の木簡、大嘗祭等天皇家に係わる木簡等が出土した。溝の木削層はすべて持ち帰り、順次洗浄中であり、現在確認した木簡は、7,000点にのぼる。主要な木簡については、年報1998-IIに集録している。

第87次調査は、遺跡の発見の契機となった1991年の調査の南、旧池南汀から丘陵斜面を対象に実施した。谷を埋め帷段状に造成した工房址、炉跡、掘立柱の倉庫等、飛鳥池工房の実務部内に関係する遺構、遺物、また工房全体を区画する大規模な掘立柱塀を検出。出土遺物には、従前知られていた漆関係・ガラス・銅・鉄製品鑄造関係遺物の他、水晶・コハク玉、金・銀製品の鑄造を物語る遺物が出土し、宝飾品全般を製造する総合的一大工房跡と判明する。

第86次調査は、飛鳥池東の谷部を対象に、この地域の土地利用状況の確認を主眼に、谷全域にトレンチを設定して調査を進めた。この地域も7世紀中頃にはすでに開発されており、西側の丘陵寄りにこの地域の基幹水路となる大溝を、その東側には、掘立柱塀で区画された大規模な建物等の存在を明らかにした。

舒明天皇発願の百濟大寺と目される吉備池廃寺第2次調査（第89次）は、金堂西側に存在する土壇の性格解明と伽藍の範囲確認を目的に実施した。西側の基壇は稀にみる規

模の塔跡であることを確認。また南面回廊も検出し、当伽藍は最古の法隆寺式伽藍配置の可能性が高まった。

(巽淳一郎)

(現地説明会) 4月27日飛鳥藤原第84次(飛鳥寺東南部) 島田敏男

3月14日飛鳥藤原第89次(吉備池廃寺) 佐川正敏

平城京の調査

1997年度に平城宮跡発掘調査部がおこなった発掘調査は平城宮跡7件、平城京跡20件、京内寺院・その他3件で、計30件におよんだ。このうち、学術発掘および史跡整備にともなうものは7件3,768m²、住宅建設等による緊急調査が23件4,838m²と、緊急調査の比重が大きい一年であった。おもな調査の成果は以下の通りである。

平城宮跡では、式部省東方の東面大垣(第274次)、東院園池とその周辺(第280次・第283次・第284次・第286次)など、宮の東南部に調査が集中した。第274次では、宮内基幹排水溝から東一坊大路西側溝へ流れ出る溝によって、東面大垣が途切れていた時期のあったことが判明した。第280次では、東院東南隅にあって隅楼といわれてきた特殊な平面をもつ掘立柱建物の全容をつかみ、第284次では、東院園池南岸および二条大路北側溝の様相をあきらかにした。宇奈多理神社境内でおこなった第283次では、基壇建物の石組雨落溝を検出し、その東の第286次では、東面大垣西壁(宮内側)の建設用堰板痕跡を検出するなど、画期的な発見が続いた。

一方、京城では左京二条二坊十一坪周辺(第281次・第282-10次・第282-16次・289次)と、右京三条一坊三・四坪(第288次・第290次)で、比較的規模の大きい調査をおこなった。前者では、二条条間路の南北両側溝をはじめとする条坊遺構のほか、法華寺の寺域にひらくと想定される礎石建の門、十一坪の北辺にひらく掘立柱棟門を発見した。また、坪内では既調査区と連続する掘立柱建物を検出し、十一坪は十二坪と一体で2町占地のブロックである可能性が高くなった。後者では遺構が希薄なものの、朱雀大路西側溝周辺の様相をあきらかにした。第282-11次・12次・13次では、市庭古墳の周濠と周堤を検出し、旧大乘院庭園北岸の調査(第285次・第287次)では、近代の地形造成が予想よりも大規模で、近世以前の汀線はさらに北にのびることをつかんだ。そのほか、阿弥陀浄土院推定地(第282-6次)、長屋王邸(第291次)

などで調査をおこなった。

以上の調査成果の詳細については、年報Ⅲを参照されたい。なお、発掘調査にともなう現地説明会は、以下の日時に開催した。

(箱崎和久)

6月14日 平城宮第274次(東面大垣) 山下信一郎

12月6日 平城宮第280次(東院南東隅) 内田和伸

建造物の調査と研究

南都を中心とする古代建築の調査研究 従来から継続している本研究は、とくに現在は、これまでに蓄積された調査研究と保存修理工事の成果をもとに、古代建築の設計計画や工法からみた軸組・架構・小屋組の構造、各部位の計画寸法、各部材の長さや大きさ、樹種、納まりなどの研究をすすめている(P.20-21参照)。また、東大寺転害門の実測をおこない、技法、復原考察、修理手法などの研究をおこなった(P.24-25参照)。

遺跡の建造物復原方法の研究 都道府県の協力を得て収集した史跡の建造物復原事業の実態アンケートから、事業のあり方、復原のあり方などについて問題点と課題を整理分析した。それらの成果をもとに、各地の自治体の担当者を交え、今後のあり方を討論した(P.62参照)。

平城宮建造物復原実施にともなう調査研究 大極殿の復原実施設計準備に関する監修において、古代建築の技法および復原実施上の諸問題などの検討をおこなった(P.69-70参照)。朱雀門・東院西建物の復原施工の監修では、材料の選択、原寸図作成並びに木材加工、瓦の原型作製などの機会に細部の検討をおこなった(P.68参照)。

滋賀県近世民家調査 3か年継続事業の最終年度となり補足調査をおこない報告書を作成した(P.28-29参照)。

鳥取県近代化遺産総合調査 2か年継続事業の最終年度にあたり、第二次調査と補足調査をおこない、報告書を作成した(P.65参照)。

建造物保存修復の理念及び方法に関する日独共同研究 ドイツの二か所(ザクセン州マイセン市・ヘッセン州リンブルク市)で都市の保存地区について、歴史的な建造物の保存、修復、活用などの状況を調査した(P.50参照)。ドイツからも研究者を招聘し、橿原市今井町その他の調査に協力した。

各地の史跡の整備事業(建物復原)への助言・指導 新居関(新居町)、崇廣堂(伊賀上野市)、近江国庁(滋賀県)、津山城(津山市)などの遺跡整備における建物